



Title	トーランド『キリスト教は神秘的でない』とその匿名批判書(1696)
Author(s)	有江, 大介
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター年報, 15: 9-13
Issue Date	1995-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/5470">http://doi.org/10.15057/5470</a>
Right	

## トーランド『キリスト教は神秘的でない』と その匿名批判書（1696）

John Toland's *Christianity not Mysterious*,  
and an anonymous Essay against it (1696)

有江大介  
ARIE Daisuke

I 西欧啓蒙期における自然科学、社会科学の成立ないし確立にとって、キリスト教の神学的議論が重要な意義を持ったことは既に常識となっている。英国の理神論はその典型である。しかし、たとえばその代表的文献である、ロック『キリスト教の合理性』（1695. 以下、『合理性』と略記）とトーランド『キリスト教は神秘的でない』（1696. 以下、『神秘的でない』、NMと略記）の影響関係について見てみると、近年の著作でも前世紀のL. スティーヴンの評価を今なお踏襲しているなど<sup>1)</sup>、わが国のこの分野の研究は端緒的段階にとどまっているといえよう。そうした中で浜林（1987）は、経済思想史家によって社会科学的見地から書かれた数少ない有益な書物の一つであるが、これもあくまでも概説書である。

理神論関係の文献の中では、ロックの『合理性』は翻訳も含めて最も入手しやすいと思われる。また、トーランドの『神秘的でない』も現在では初版のリプリントがガーランドから *The Philosophy of John Locke* シリーズの一冊として出版されており、誰にも読めるようになっている<sup>2)</sup>。ところで筆者は昨年夏、スコットランドのエディンバラ大学近傍の古書店で、『キリスト教の信仰：神秘的なるもの』（以下、『信仰』、CBと略記）と題する『神秘的でない』批判の匿名書を、偶然手に入れることができた。刊行年は『神秘的でない』と同じ1696年なので（扉コピー参照）、それへの反論の書物としては最も早い物の一つであると推測される。ブリティッシュ・ライブラリーの目録でも、トーランドの『神秘的でない』の項に、関連文献の匿名書の一つとして最初に記載されている<sup>3)</sup>。

II トーランド（John Toland: 1670-1722）は、スティーヴンによって極めて怪しげな山師のような人物に描き出されている。また、理神論についての18、19世紀の標準的なテキストであり、多くの著述家が種本としたと言われているリーランド『主要理神論者概観』（1754, 1756）では、トーランドは「キリスト教徒を自称しながら、不信仰を広めるのに奉仕することを生涯の大半の仕事とした」（Lealand 1802, I. 48-49）と酷評されている。しかし、出版されるや否や、数多くの反論書、パンフレットの出版を誘発するなど大きな反響を呼び起こし、トーランド自身が異端攻撃や逮捕も含む弾圧の危険にさらされた事実は、彼を単なる山師に貶めることはできないと思われる。ロックとの関係や政治的な活動の評定は別の機会に行うとして、トーランドの『神秘的でない』は、A. コリンズ『自由思想を論ず』（1713）、M. ティンダル『キリスト教は天地創造と同じように古い』（1730）とともに「英国理神論の三大著作」（大津 1986, 46頁）の一つに数えられているように、少なくとも啓蒙期の思想家たちの知的営為に無視できない影響を与えたに違いあるまい。

【神秘的でない】は、序論 (NM iii-xxx), 要旨 (NM 1-6), 第一編「理性について」(NM 7-22), 第二編「福音書の教義は理性に反しない」(NM 23-66), 第三編「福音書には神秘的なもの、理性を越える [above Reason] ものではない」(NM 67-176), という構成である。第一の特色は、「信仰は知識である」(NM 145) という言葉に象徴される徹底した理性主義である。ただし、トーランドの言う理性は「常識」である点で合理主義とは異なり (NM 9), 経験的に観念と対象が一致する「明証性」を持つものだけが意味ある知識であるという点で蓋然知を認めるロックや懐疑主義とは異なる (NM 16, 20-21)<sup>4)</sup>。もともと、キリスト教の神学用語では神秘 [mystery←misterium (L)] という言葉は、三位一体、受肉、聖体、救済等、それ自体で教義の本質をなす啓示的な真理を意味しているので (小林 1954, 255頁), 'not mysterious' なる表現自体が、正統信仰の擁護者にすればそれだけで罰あたりに思われよう。

Ⅲ さて、£18.50 (約3,000円) で運良く買うことができた【信仰】は、その扉の長いタイトルを試訳してみると次のようになる。「キリスト教の信仰。ここで以下のことが主張され証明されている、すなわち、福音書には理性に反するものは何一つない、しかし、その中の一部の教義は理性を越えている。そしてこれらによって我々は信仰に導かれる以外になく、それらは正しくも神秘的と称される。【キリスト教は神秘的でない】なる書物に答えて」(註3) 参照)。見られるように、ここで表明されている立場は、ダブリンのP. ブラウンのような啓示信仰擁護からの熱狂的反論ではない。福音書の理性主義的な解釈を認めた上で、「理性を越える」ものと「理性に反する」ものとを区別する点は、明らかにロックの【人間悟性論】での啓示と理性の関係のとらえ方、あるいは最後のケンブリッジ・プラトニストと言われるJ. ノリスの系譜に連なる。5頁分の目次の後から本文が始まるが、その冒頭に改めて扉のタイトルを縮めた次のような表題を掲げている。「一部のキリスト教の教義は適切に神秘的と称される。そして理性を越えていると称される」。この前半部分は末尾まで見開きページの上部に欄外見出しとして置かれており、人智を越えた啓示は理性を越えているという主張が、トーランドに対する基本的立場であることがわかる。

人は神の属性さえ理解できればその本質は理解できなくてもかまわない (NM 79-96) というトーランドの主張は、キリスト教の啓示性の否定の契機を含意する<sup>5)</sup>。これに対して、ソツイニニ主義等のレッテル張りの議論ではなく、経験論に基づく新しい認識論や科学的知識の普及を認めた上でキリスト教信仰を擁護するには、理性的認識とそれを越える啓示との関連を統合的に説明することが求められよう。次に必要なのは、理神論が依拠する「自然」自体に秩序性と摂理を見いだしてそこに神の存在を担保することである。前者を試みているのが【信仰】である。

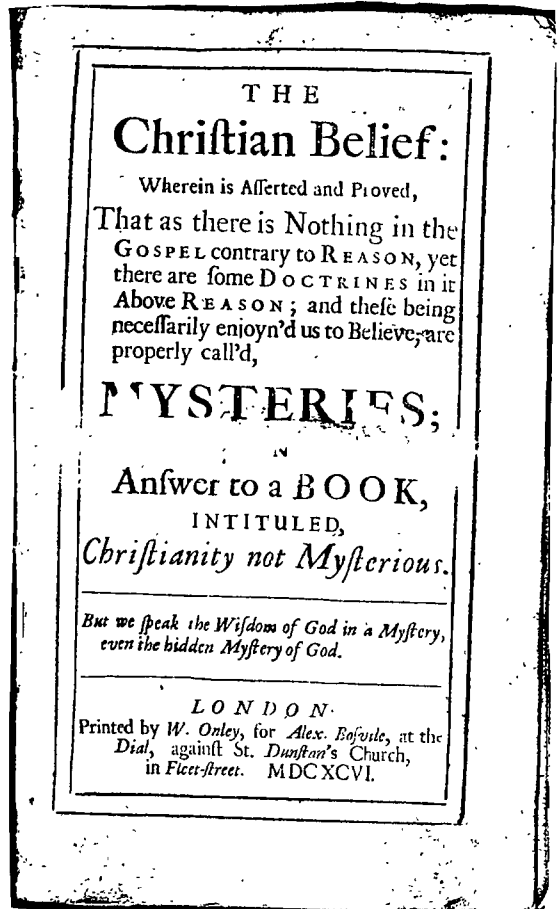
Ⅳ 【信仰】の本文は、【神秘的でない】の記述に対応しながら、繰り返しも多いが、大きく以下のように内容を区分できる。①人間の知識・認識について、②啓示的事実と自然的理性、の認識論的部分と、③神秘性の概念と福音書の教義、④キリスト教の擁護、の【新約聖書】の記述の評価の部分である。①の要点は、「熱心な理性信奉者」(CB1) に対して、物的世界の対象物の知覚によって外界についての知識が形成されるが、同時に天使や精霊の観念も無媒介な直覚によって人の心に確固としたものとして形成されていることを言う点である (CB3)。②では、知覚の対象である物質的な事物と、非物質的な事柄との混同によって理性の使用の領域

を誤って、それを宗教に対して適用すると【聖書】の啓示が神秘的であることを見失ってしまうとする (CB 16, 22-23)。以上を述べるのにあたって依拠しているのは、知覚による知識の限界を啓示によって越えるというロックの枠組みであって、唯一【人間知性論】のみが明示的に言及されている (CB 10)。これらを前提に、③以下では「理性を越える」ものが「神秘的」であることを繰り返しながら、【聖書】解釈を進め、トーランドの「悪意に満ちた企図」(CB v) を検討し終わったとする。

しかしここで注目すべきは次の点である。それは、末尾に近い場所で、神聖な事実は主として神秘的であるがその部分は「理解できないし、必ずしも理解する必要はない」とする点では「読者は我々 [トーランドと自分] の間の違いを大きなものとは思わないかもしれない」と著者自ら述べていることである (CB 149)。もちろん、トーランドが啓示的真理のすべての現れは「理解可能」とする点が自分とは極めて異なるとは言うものの (Ibid.), 批判者の立脚点が図らずもトーランドとはそれほど遠くないことがここに示されている。

V ところで、冒頭に掲げた啓蒙期における社会科学の成立を念頭に置いたとき、「神秘的でない」と、同年に出版された批判の書【信仰】から、何が示唆されるのであろうか。まず言えることは、知識人に対するロックの認識論の圧倒的影響力である。【信仰】がそうであるように、トーランドに反対して啓示を擁護する側も、実質の本質を認識し得ないというロックの立場を踏襲する限り、啓示の超越性はいわば実践的に要請されるだけのことになる。したがって次に、ここから人間の霊魂はデカルトと違って理性で把握できる範囲内の物質的な存在と見なされることになるのは不思議ではない。これはそのまま、運動は物質に内在するという「セリーナへの手紙」(1704) に見るトーランドの物活論ないし「汎神論的唯物論」(Jacob 1976, 222/192頁) に繋がっている。このことと、既に1700年頃の知識人は、人間は無限の宇宙の中で太陽のまわりを回る小さな惑星の上にいると考えていたことを思い起こせば (Easlea 1980, 1/12頁), 18世紀初頭の知的雰囲気は推測されよう。

つまり、啓示を棚上げにした理神論以降は、宇宙や人間社会の道徳を考えると、神的存在からではなく物質や人間から出発して考えることが、一群の知識人にとっては普通のことになったのである。したがって、啓示を根拠づける論理は、自然法則の背後に神の摂理を見るデザイン論が一身に担うことになる。



(扉のコピー。一部痛みで見えないところがある。)

ところでアイルランド出身のトーランドは、グラスゴウとエディンバラで教育を受け、そのときデイヴィッド・グレゴリー (David Gregory: 1661-1708) からニュートン (Isaac Newton: 1642-1727) の自然哲学の講義を受けている。トーランドは物質と運動の関係についてクラーク (Samuel Clarke: 1675-1729) と論争した。クラークの『神の存在と属性』(1706) は、ボイル・レクチャーでのトーランド批判である。クラークはさらに、ニュートンの代理でライプニッツ (G. Leibnitz: 1646-1716) と運動と空間についての論争も行っている。クラークのこの書物 (第4版, 1716) の7年に渡る研究を契機にそれにあき足らず自ら自然神学の著作を物したのがケイムズである (Ross 1972, 60)。一方、徹底したデザイン論批判を展開したのがヒュームである。こうした系譜を考えたときに<sup>9)</sup>、「理神論は、レッシングの戯曲やアダム・スミスの道徳哲学を統一する思想として、中心的な機能を果たしている」(Emerson 1968, I. 651/4.508頁) と言っているとすれば、ケイムズをパトロンとし、ヒュームの友人であるスミスの知的環境は啓示的世界からもっとも遠いものであったのではなかろうか。経済学はやはり、現世的・即物的世界の文脈から成立したに違いない。

#### 註

- 1) トーランドに対して冷笑的な姿勢で一貫しているスティーヴンは、『神秘的でない』は自分が名声を得るために「ロックとの個人的関係を世に誇り、ロックの教説に自分の思弁をいわば接木しようと企てた」(Stephen 1962, 78/104頁) と決めつけている。鎌井は、『合理性』に「刺激された」トーランドが『神秘的でない』を書いたとしている (鎌井1988, 20頁)。確かにトーランドの認識論はロックに依拠しているが、しかし逆に、『合理性』の護教的部分は、『神秘的でない』の手稿の写しを参照して書かれていることがわかっている (Jacob 1976, 214/185頁)。
- 2) Toland, John *Christianity not Mysterious: OR A TREATISE Shewing, That there is nothing in the GOSPEL Contrary to REASON, Not ABOVE it: And that no Christian Doctrine can be properly call'd A MYSTERY* (London, 1696), xxxii+176pp. rept. ed., New York: Garland Publishing, 1984. なお、1696年の別の版の復刻が Routledge/Thoemmes から、History of British Deism シリーズの一冊として1994年に刊行された。
- 3) プリティッシュ・ライブラリーの目録のトーランドの項にある、本書——著名な書物かもしれないが——およびその他の『神秘的でない』批判書は以下の通り (括弧内はシェルフ・マーク)。  
*The Christian Belief: wherein Asserted and Proved Mysteries in Answer to a Book intituled Christianity not Mysterious*, W. Onley for Alex. Bosville. London: 1696, v+152pp. (699. d. 7. (2))  
*The Occasional Paper, No. III. Being reflexions upon Mr. Toland's book, called Christianity not Mysterious, etc.* London: 1697. (4256. 66. 43)  
 Gailhand, Jean  
*The Blasphemous Socinian heresie diproved and confuted,....with animadversions upon a late book called, Christianity not Mysterious.* London: 1697. (855. e. 10)  
 Hill, Oliver  
*A Rod for the back of Fools: in answer to a book of Mr John Toland, called, Christianity not Mysterious,....and to the lecture of one Dr. J. Brown, taken from the author's book against the circulation: and to answer of one Mr. J. Gardiner...to that pretended Lecture.* London: 1702. (699. d. 7. (4))

なお、*Dictionary of Anonymous and Pseudonymous English Literature*. Vol. 9 (London: 1962) は、オクスフォードのカレッジの一つクライスト・チャーチに遺贈された William Wake (1657-1737) の蔵書カタログの記載を根拠に、この匿名書を論争家 Samuel Bold (1649-1737) によるものと推定している (p. 50. この辞書の記述については、一橋大学社会科学古典資料センターの中野悠紀子氏からご教示を受けた。記して感謝の意を表したい)。しかし、*DNB*のBoldの項 (Vol. II, pp. 779-780) にはそうした記述はなく、著者は確定的ではないように思われる。

- 4) 『神秘的でない』の内容評価については、意見は異なるが英語文献では Cragg (1950, Ch. VII), 邦語文献では大津 (1986, 2章) を参照のこと。トーランドの運動論、物質論、宇宙論とニュートン主義との関連については Jacob (1976, Ch. 6) を参照されたい。また、トーランド研究書としては、さしあたり Sullivan (1982) を挙げておく。
- 5) トーランドは1700年にハリントンの『オシアナ』を復刊している。ここに見られる共和主義への志向とシヴィック・ヒューマニズムを考えれば、トーランドとスコットランド啓蒙との間に、エディンバラでの教育を含めて、何らかの内的関連を見いだせるかもしれない。

#### <参考文献>

Cragg, G. R. *From Puritanism to the Age of Reason: A Study of Changes in Religious Thought within the Church of England*. Cambridge: Cambridge University Press, 1950.

Easlea, Brian *Witch Hunting, Magic and the New Philosophy: An Introduction to Debates of the Scientific Revolution 1450-1750*. Hassocks: Harvester Press, 1980. 市場泰男訳『魔女狩り対新哲学』, 平凡社, 1986年。

Emerson, R. L. 'Deism', in *Dictionary of the History of Ideas*, 4 vols. New York: Scribners, 1968, vol. I. 村上陽一郎他編訳『西洋思想大事典』全4巻, 平凡社, 1990年, 第4巻所収。

Jacob, M. C. *The Newtonians and the English Revolution 1689-1720*. Hassocks: Harvester Press, 1976. 中島秀人訳『ニュートン主義者とイギリス革命』, 学術書房, 1990年。

Lealand, John *A View of the Principal Deistical Writers that have appeared in the last and present century. With Observations Upon Them, and some account of the answers that have been published against them; in several Letters to a Friend*. London: Baynes, 1808. 2 vols. (1st ed. of vol. I, 1754; 1st ed. of vol. II, 1756)

Ross, Ian S. *Lord Kames and the Scotland of his day*, Oxford: Clarendon Press, 1972.

Stephen, Leslie *History of English Thought in the Eighteenth Century*, New York: Rupert Hart-Davis, 1962. 2 vols, (1st ed. 1876) .中野好之訳『十八世紀イギリス思想史』上・中・下, 筑摩書房, 1969-70年。

Sullivan, R. E. *John Toland and the Deist Controversy*, Cambridge (MA): Harvard University Press, 1982.

大津真作 『啓蒙主義の辺境への旅』, 世界思想社, 1986年。

鎌井敏和 「ケンブリッジ・プラトン学派概観」, 新井明・鎌井敏和編『信仰と理性——ケンブリッジ・プラトン学派研究序説——』, 御茶の水書房, 1988年, 所収。

小林珍雄編 『キリスト教用語辞典』, 東京堂出版, 1954年。

浜林正夫 『イギリス宗教史』, 大月書店, 1987年。

(横浜国立大学経済学部助教授)

(本論文は、平成6年度文部省科学研究費一般研究Cによる研究成果の一部である。)